

ゆうせんしっぽう
有線七宝

<概要>

保 持 者

しばた あきら
柴田 明

瀬戸市在住、1942 年 7 月 16 日生まれ（記者発表日現在 満 83 才）

七宝は、一般には金属製の素地に釉薬^{ゆうやく}を焼き付けたものである。今日につながる伝統的な七宝は、江戸時代後期に尾張国で考案された有線七宝（薄いテープ状の金属板によって、模様の輪郭を表現する技法）に始まる。あま市や名古屋市域で生産される伝統的な七宝製品は現在、尾張七宝^{おわりしっぽう}と呼ばれている。

有線七宝の制作工程は、図案、素地作り、下絵描き、模様付け（植線^{しょくせん}）、釉薬差し^{ゆうやくさ}、焼成、研磨、飾付けの順に進行する。

今日の「有線七宝」は、伝統的な有線七宝の植線や釉薬差しの技術等を基に、意匠や釉薬に工夫が加えられ、高度な芸術的表現を可能とする工芸技法として高く評価されるものである。

伝統的工芸品^(※1)においては各工程に専門職人がいて、分業体制により規格的な製品生産が行われてきた。これに対し、伝統工芸^(※2)においては一人の作家が全工程を担い、伝統的な技術をもとに独創的な作品制作に取り組んでいる。伝統工芸系の現代七宝作家の第一人者が、柴田明氏である。

柴田明氏は 1942 年、三重県四日市市生まれ。愛知県立瀬戸窯業高等学校を卒業後、株式会社安藤七宝店（名古屋市）に入社し、当地の伝統的な七宝作りに取り組んできた。同社において工場製品の生産に従事する一方、個人作家としての作品制作も展開している。

伝統的工芸品としての尾張七宝では、花瓶や皿の定型的な器形と花鳥模様、赤（エンジ）または青（紺）色の透明釉を中心とした、伝統的な意匠を基調としている。これに対し柴田氏は、複数の曲面や平面を組み合わせ構成した現代的な器形、器面全体を覆うように展開する独自の連続的な抽象模様、難度の高い白色系不透明釉の多用が、作風の特徴である。伝統的な尾張七宝の技法をベースとしつつ、器形、模様、釉薬において創意工夫を凝らし、現代七宝の新たな境地を切り拓いている。

こうした独自の取組は、我が国の伝統工芸界において高く評価されている。1970 年以来日本伝統工芸展に 50 回以上入選し、審査委員も務める日本を代表する七宝作家である。近年は公募展へ毎年招待出品するとともに、勤務する安藤七宝店では後進の指導にもあたり、伝統工芸の普及振興や後継者育成に寄与している。

「有線七宝」は芸術上の価値が高く、本県の工芸史上に特に重要な地位を占めている。柴田明氏は、有線七宝を中心とした伝統的な尾張七宝技術を継承しつつ、芸術性の高い作品づくりを展開している。こうしたことから、「有線七宝」を愛知県指定無形文化財（工芸技術）として指定し、柴田明氏をその保持者として認定する。

※1) 伝統的工芸品 「伝統的工芸品産業の振興に関する法律」(通称「伝産法」)に基づき、経済産業大臣が指定するもの。愛知県内ではこれまでに15件が指定されている。「尾張七宝」は、1995年4月に指定された。

※2) 伝統工芸 「日本伝統工芸展」を主催する公益社団法人日本工芸会においては、伝統的な技術を継承しつつ新たな創作的な表現と芸術性を評価している。これは、国の重要無形文化財制度における評価基準「歴史上または芸術上価値の高いもの」に通じるものである。



柴田明氏近影



銀線付作業風景



柴田明作「有線七宝抽象文花器」

第70回日本伝統工芸展（2023年度）、日本工芸会保持者賞
国所有（文化庁保管）

高さ 22.0cm、幅 24.5×21.0cm